

EXPRESS LOVE

五瀬尊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友達から「純恋愛モノ書いて」って言われてやけくそ気味に書いた小説です。慣れない文章ですが、長い目で見てやって下さい。

ロマンは少々。砂糖は吐くほど（に出来たら良いな）。

目次

初夏編

#1	高校生の放課後	1
#2	高校生と「恋」	5
#3	喫茶店と2人	9
#4	進まない2人	13
#5	友人達の結託	17
#6	思わぬ進展	21
#7	夕焼け、放課後、教室に2人きり	25
#8	2人の初デート	29
#9	転校生（従兄弟）	36
#10	スピード勝負	42

初夏編

#1 高校生の放課後

高校生の放課後、たとえば大方さっさと帰ってしまう奴と、友達と他愛もない会話を交わしたり、部活に行く奴に分かれるだろう。俺も普段ならばいの1番に帰ってしまうのだが、今日はそうも行かないようだ。それは、今朝方まで遡る。

「はー、蒸し暑・・・まだ5月だぞ何でこんなに気温が高いんだ・・・。」
実際は気温が高いんじゃないやなくて、体感温度が高いんだから、これは間違ってるんだけど・・・口を着いて出てしまっただよな・・・。駅から大した距離歩いて無いのに、リュックサックが当たってる部分が汗ばんで肌に密着してくるし。ま、着替えあるから良いけどね。と、どうでも良いことを考えながら、自分の靴箱から上靴を取り出すと、何やら紙切れが落ちて来た。

「何だこれ？」紙切れを裏返してみると、そこには『放課後1教で待ってる』とだけ書かれていた。

「はあ・・・。」紙切れを見直しながら、溜息を零す。文字を見る限り、これを書いたのは恐らく女子だろう。俺には想い人が居る。年頃の男子としては淡い期待を抱かずにはいられない。そんな期待を抱きながら、俺は第1予備教室ごと1教に向かった。因みにこの教室は普段から放課後に自学自習をしたい生徒の為に開放されてはいるが、みんな勉強するなら基本的にHR教室か図書室へ行ってしまうため、こんな薄汚れたような教室を使おうという生徒は居らず、下手をすれば此処が解放されていると言うことを知らない生徒まで居るのではないかとも言われる不遇の教室である。まあ、告白には持つてこいならしく、時折この教室でカップルが誕生しているらしい・・・。不遇でも無いか？学校の意図からは大きく外れているが。さて、斯くして1教に辿り着いたが果たして、そこで待っていたのは、セミロン

グの微かにカールの着いた焦げ茶色の髪を肩口まで垂らし、少し顔を俯かせた女子生徒―俺の想い人でもある―小柏こがしわ 彩葉あやはだった。西へと大分傾いている日は、深い角度で成層圏を通り、青い光の弾かれた「夕焼け」と呼ばれる赤みを帯びた光となつて彼女の横顔を儂げに照らしている。

「・・・えーと・・・。」その姿に目を奪われ、何と声を掛けたものか考えられなかった。ただ、その声に彼女が気付き、ふっと顔を上げる。「あつ、北城君きたしろ、来てくれたんだ・・・。」顔を上げた彼女は一瞬だけ目を驚いたように見開き、その後、何処か嬉しそうな、でも、恥ずかしげに頬を赤らめた。彼女の目は一般に言う大きくてぱっちりした目とは違うが、ふんわりした弱い巻き毛の髪に良く合う綺麗な形をしている。

「ああ、まあ、女子からの手紙じゃ無視つて言う訳にも行かないからね。待つてるのが小柏さんだとは思わなかったけど。」男子は好意を抱いている女子の前では饒舌になる。俺もその例に漏れず、何か面白い話題は無いかと考えていた。

「そう、かあ・・・。」しかし、彼女のふんわりとした雰囲気とほんの少し首を傾げたような様子を見ると、そうして考えているのが馬鹿らしく感じられ、考えるのを止めた。彼女のこの雰囲気魅了される男子は少なくは無い。と、言うより、クラスの大多数の男子が彼女を好ましく思っている節もある。

「それで、今日はどうかしたの？」考えることを止めて、最早会話はじめの決まり文句とすら扱われる言葉を投げかける。

「え、ええつと・・・その・・・あの・・・べ・・・。」言葉が定まらないのか彼女は段々と顔を俯かせて行く。が、意を決したのかガバツと顔を上げ、

「勉強教えて貰えませんか!」俺は危うく、膝から崩れそうになった。自分の期待し過ぎはかなり恥ずかしいものだ。自分が馬鹿みたくにも見えるからね。

「そ、それは良いけど・・・。小柏さん、結構勉強出来る方じゃ無かったっけ?」確か、課題テストでは俺よりも上の教科もあつた筈だ

が・・・。

「そ、それは、そうかも知れないけど、ほら、自分と同じレベルの人と勉強した方が捗る気がするじゃん？」何故最後が疑問系なのか分からないが、一理ある。

「まあ、それもそうか・・・。じゃあ、どちらかと言えば教え合いかな？」

「う、うん。そうだね。」何でさつきから挙動不審になってるのか疑問が残るけど、まあ、良いか。小柏さんに近付く口実が出来た訳だし。・・・ちよつと黒いかな。

「さて、それで今日はこの後何かあるの？」確か、小柏さんは部活動には所属していなかった筈だが・・・。

「ううん。何も無いよ?」どうかしたの?とでも言いそうな表情で、と言うより、早速その表情で聞き返していると思えない顔をされてしまい一瞬思考通りの返答をして良いか迷ってしまう。が、取り敢えずこの場は羞恥心を押し殺すことにした。

「じゃあさ、一緒に帰らない?」自分の顔が紅くなっていくのが分かる、恥ずかしさを多分に含んだ言葉だったが、彼女は俺よりも頬を上げさせ、恥ずかしさを露わにした顔をしていた。

「う、うん。良い・・・よ・・・?」

「何故に疑問系?」

「ま、まあ気にしないで、帰ろ?」そう言っ、彼女は俺の腕を引っ張り、教室の出口に向かう。コレじゃまるで恋人だな。と、考えたところで恥ずかしくなって考えるのを止めた。まあ、ぶっちゃけ想い人とこういう状況になって恥ずかしがらない奴は居ないとは思うけどな・・・。

放課後、夕暮れ、校門を通過していく2人の男女の後を付ける怪しい影が2つ。

「アレは、上手くくつついたって事で良いのかな?」

「うーん。どうだろう・・・。彩葉は奥手だからねえ。帰り誘うのが限界だったんじゃない?」

「まあ、そこら辺は明日問い詰めましょうか。・・・上手く行くと思う？」

「さあ？でも、お膳立てはしてるんだから信じるしか無いじゃん？」

「お膳立てって言うか煽ってるだけじゃない。彩葉がいつまで乗ってくれるかしらね？」

「うーん。北城君から誘ってくれば早いのかなあ。」

「あっち懐柔するのは無理でしょ。見るからに堅そうだし。」彼女たちは知らない。今回彩葉を誘ったのもその堅そうな北城だと言うことを・・・。

「ま、当人達に任せましょうか。今日は帰ろう。」

「そうねー。明日が楽しみだわ。」高校生の間は人の恋を笑って居られるモノだ。まあ、そうして笑っていられるのも束の間ではあるが。いつか、砂糖を吐かされる事になるのだから。

#2 高校生と「恋」

登校時間。慌ただしく本日の課題を終わらせようとする生徒もいれば、朝から友人と他愛もない会話を交わしたり、部活動の朝練に勤しんだり・・・と、出鼻からデジャヴ気味だが、それはさておき朝からグループで何やらおしゃべりをしている女子が数人。

「で、北城君とは上手く行ったの？」おしゃべりと言うより、問い詰められている（尋問？）様な状況だが・・・。

「え？ええつと、それは・・・その・・・。」問い詰められた女子生徒——小柏 彩葉——は、答えにくそうに口ごもり、そのまま俯いて黙り込んでしまった。

「・・・はあ、折角お膳立てしてあげたのに、彩葉は奥手なんだから。」呆れ返るとはこういう状況だろうか、だが、言われた方も黙ってはいなかった。

「むう、2人とも面白がって煽ってただけじゃない。それに、奥手つて言われても、振られたらつて思うと怖くてもう1歩が踏み込めないのよ。」彩葉という女子生徒は恥ずかしげに顔を赤らめ、そっぽを向いてしまう。

「あはは、良いね。青春じゃん青春じゃん。もつと、悩んで恥ずかしがって。ウチらを楽しませてよ。」前半は本音だろうが後半は明らかに面白がって茶化している（しかも、内容が中年のおじさんがするよくな話になっている）。まあ、何にしても「言ってみただけ」な感じが否めないが。

「もう！からかわないですよ。」遂に彩葉が怒鳴り声を上げかけた所で、会話に加わって居なかった女子がある事に気付いた。

「ん？ああ、彩ちゃん。愛しの王子様のご登場だよ。」その女子生徒が彩葉の肩を叩きながら指を指した先には、

「へ？」男子には勿体ないほどの艶やかな綺麗な黒髪に、鋭い切れ目に優しい光を称えた瞳、口元に柔らかく浮かぶ微笑み。校内の女子からの人気も高く、同時に彩葉の想い人である北城 修也なおやがいた。

「おはよー。北城君。彩葉に用事？」グループの女子の1人が早々と

声を掛ける。

「ああ、おはよう。まあ、用事って程の事じゃないんだけど。」修也が愛想笑いをしながら頭に手を当て、目だけで「良いかな？」という様な表情を作り出す。

「あー、遠慮しなくて良いよ。はい、彩葉、行ってらっしゃい。」修也に応答した女子は彩葉を無理矢理押し出した。

「ちよ、ちよっと。」彩葉は抗議の声を上げているが、その表情は満更でも無さそうだった。

「えーと、小柏さん？」修也に声を掛けられ、彩葉がビクリと肩を振るわせる。

「な、何？」世の中の男子は、女子のこういった何気ない、可愛らしい挙動に引かれるのかも知れない。

「あのさ、今日の帰り空いてる？」

「え？あ、うん。予定は無いけど……。」修也の言葉の意図を掴めず、目を泳がせる。

「じゃあさ、今日の帰りに駅の傍の喫茶店でちよっと勉強して帰らない？」恐らくコレは北城にしては頑張った誘い文句だろう。これまでを見れば分かる通り、2人はそろいも揃って奥手である。同級生目線から見れば、うじうじして鬱陶しい。大人から見れば青春らしくて大いに結構。高校生の恋とはおおよそそんなモノだが、この2人の場合、何時になつたらくつつくんだよと言いたくなるのは仕方の無い事だろう。

「……うん。北城君が良いなら。」少し考えた後、彩葉が頷く。

「じゃ、また帰りに。」それだけを言っ、僅かに手を挙げて修也が踵を返す。

「うん。」それを見送る彩葉も何処か幸せそうな顔をしていた。早速、誰もが羨むカッパルの様相を呈しているが、まだこの2人は付き合っていない。付き合っなどいないのだ。

「良かったじゃーん。相手からお誘い貰えて。」会話が終わったのを見計らってグループの女子が彩葉の背中をパシーン！と小気味の良い音を立てて叩く。

「あ、うん。でも、どうしよう。今日私お金持ってきてない。」その言葉を聞き、周りの女子が呆れ顔になる。

「彩葉？大丈夫よ？こういう時は男子が奢るって言うのが暗黙の了解だから。」それが今のご時世でも通用するのは不明だが、一応は誘った方が奢るのは当たり前だろうか。

「でも、良いのかなあ・・・。」とは言うものの、彩葉はまだ迷っているようだ。

「ええい、もうそれは気にしない！それよりさあ・・・」彩葉の迷いをぶった切り、女子生徒はいつものお喋りモードに切り換えて行った。

Side out

「それでさあ？北城、お前小柏と付き合ってるのか？」時刻が8時15分を過ぎ、教室の中がかなり騒がしくなってきた頃、友人にそんな事を聞かれた。ソイツは、本を読んでいる俺の机の横にしゃがみ込み、机に肘を乗つけた気怠げな雰囲気醸し出す体勢で話し掛けて来ている。

「別に、付き合っていないねえよ。」そう、俺は好意を抱いてはいるが付き合っている訳ではない。何せ、相手も同じ様な好意を持っているとは限らないのだから。

「つつてもよー、昨日お前が小柏と一緒に帰ってた所を見たって奴がいるんだよ。」誰だよ、そんな事をぺらぺら喋りやがるのは。

「一緒に帰ったからって、付き合ってる」に直結はしねえだろ。だって、あれか？女友達と集団で帰ってる奴はみんなハーレム持ちなのか？」少々、極論に近いかとも思ったが、結局コイツが言っている事を突き詰めて行けば、そういう事にもなるだろう。

「いや、そうは言ってねえけど・・・。まあ、いいや。」と、ソイツが言ったところで予鈴がなった。

「おら、予鈴なったぞ。さっさと席戻れ。邪魔くさい。」かなり面倒くさそうな声でそう言いながら、ソイツの足を足のサイドで蹴り飛ばす。

「ひでえな。まあ、いいや。」良いのかよ。何かコイツ気持ち悪いな。

しかし、小柏さんには放課後喫茶店では言ったが、どうしたモノかな……。あんまりがつついて、入り込んだ話をすれば嫌われるだろうし……。まあ、ちよつと探る程度に世間話でも繋いで見るか。取り敢えず、今日1日を頑張ろう。

#3 喫茶店と2人

15時40分。この時間帯と言えば、1日の課程を終え、帰宅を急ぐ学生が増える頃でもある。また、この駅前で、デパート類の店が密集しているこの周辺には、ちよつと寄り道にと、店で買い物をして行くという学生達の姿も増えている。斯く言う俺も、帰り道にある喫茶店の一角に座っている。普段ならば、喫茶店などには滅多な事では来ないのだが、今日は少し事情が違った。

「でね、此処の問題なんだけど・・・。」俺の向側の席には、想い人である小柏 彩葉が座っているからだ。と、言うのも、先日彼女から勉強を教えてくれという様な事を頼まれ、俺自身も家では暇を持て余していた事だし、俺の分らないところは彼女も教えてくれると言うので、承諾し、今日俺の方から此処に誘ったという事だ。

「ああ、そこは等式変形して・・・。」この店の自慢だというシナモンティーに薔薇の形の角砂糖を2つ投入し、それを啜りながら勉強を進めていく。

「ふー、じゃあ、今日の復習は終わりにしよ？」50分程経った頃、彼女がそう提案したので、暫く休憩してから店を出る事にした。と、言ってもお茶だけだという訳にも行かないので、追加で俺がショートケーキと彼女がフォンダンショコラを頼み、暫くお喋りに興じる事にした。

「そう言えば、北城君って、す、好きな人とかいたり・・・するの？」追加注文のケーキが運ばれて来てフォークを付けたところで、彼女が顔を俯かせた状態から、少し上目遣いでそう聞いてきた。俺は口に運んだケーキを咀嚼しつつ、フォークを皿に戻した。

「・・・うーん？何で？」こういう時は、早く結論を出そうとすれば、逆に好感度を損なう事になる。相手に気があるのなら、兎に角冷静に対応して行く事が大切だ。

「え、う．．．だって。その．．．ちよつと気になって．．．。」彼女は語気を窄め、最後には言い訳をするような語調になってしまった。「．．．まあ、気になってる人ならいるけど．．．。」ボロを出さないよう、語尾をはぐらかすようにして質問に答えた後、再び手を動かし、ケーキをつつく。あからさまに逃げの体勢だが、俺としてはこんな人目に付くような所で本音を吐露させられるなど堪ったものでは無い。恥を晒すくらいなら、俺は逃げを選ぶ。まあ、それはそれで恥だが。

「そうなんだ．．．。」彼女もまた、それだけ言うと、手元のケーキに手を付けた。上手くはぐらかせたかと思つて彼女の方を見るが、彼女は何かを言おうとしているらしく、目が考え事をするように宙を泳いでいる。

「．．．ねえ、北城君の好きな人つて．．．どんな人？」口に運んだフォロダンシヨコラを飲み込んだ彼女が口を開く。やはり物思う年頃だからなのか、彼女の言葉には好奇心が見え隠れしていた。

「どんな人．．．？うーん、一言で言えば、ふわふわしてる、かな。」一瞬「あなたです！」というような事を言いたくなる衝動に駆られたが、それを押さえ込み、ボンヤリとした返事を返す。

「ふわふわ．．．？」彼女はそう呟くと、再びフォロダンシヨコラをつつき始めた。彼女なりに何か思うところがあるのだから、それ以上恋愛話は持ち出しては来なかった。

「結局、1時間ちよつとしかいなかったね。」あれから、取り留めもない会話―恋愛の話でないと言う意味で―を続けて、20分ほど。家で用事があると彼女が言ったので、喫茶店を出る事にした。

「1時間しか、か？俺としては女子と1時間つていうのは長い方なんだが。」そもそも女子と話す事自体少ないから当然と言えば当然だが。「そうなんだ．．．。意外と女の子と居ないんだね。」どうにも俺は、女の子の影が多いと思われがちなのは何故なのか．．．。

「まあね、思春期って色々あるから。」取り敢えず、流れるような誤魔化し口調ではぐらかしておく。

「ふうん…ねえ、手、繋いで良い？」急に話題を変えて来るのか…。手繋ぐとちよつと暑いような気がするけど、まあ、良いか。

「ん。」どうしたもののか分からず、素っ気もなく手を差し出したが、彼女は嬉しそうにその手を握り返した。その手は、ひどく華奢で、それでも、確かな温もりを持っていて、握っているだけで少し幸せになった気がした。

「それじゃあ、また明日ね。」結局彼女の降りる駅で一緒に降りて、彼女の家の近くまで送って行って漸く別れた。

「ああ、じゃあね。」俺は、それだけ言って、踵を返し、歩き始めた。暫く歩いたところで一度立ち止まり、ふと手のひらを眺める。まだ、彼女の手の温もりが残っているような気がする。

「また明日、か。」大して面白くも無かった学校生活に1つ、楽しみが生まれた。ただの思えばりかかも知れない。でも、今日の事で自分の中で何かが変わった。今までとは違う、もつと近い距離で彼女と会う事が出来る。そう考えただけで、心が満たされたような気持ちになる。

「頑張ろう。」そう一言声に出して再び歩き出す。

S i d e o u t

「手、大きかったな…。」家の用事を済ませて、夕食までの暫くの間、今日の事を思い出す。

「北城君…。」少し熱の籠もった声でそう呟いてみる。それだけで、彼が傍にいるような気がする。年頃の女子には良くあると言われるが、そんな簡単に纏めて欲しくはない。だって、私にとって彼は、北

城君は――

「・・・特別だから。」そう口に出した時、彼と手を繋いで歩いた時間を思い出し、急に恥ずかしくなる。耳まで紅くなっているのが分かる。逃げるように、ベッドに身を投げ出して暫く手足をばたばたと動かし、恥ずかしさを紛らわせる。

「・・・なんであんな事出来たんだろう・・・。」それまでの会話の、彼の試すような声にムキになったのかも知れない。周りに誰もいなくて、2人きりだったからかも知れない。・・・明日、どんな顔して会えば良いんだろう。

・・・でも、会える。

「明日。また、明日・・・。」そう考えるだけで胸が温かくなって不思議な気持ちになった。ああ、「幸せ」ってこういう事だ。好きな人が居て、会えるだけで嬉しくて、不思議と胸が満たされてくる。

「・・・頑張ろう。」そう一言口に出してから、ベッドから勢いよく上体を起こす。そろそろ、お母さんが夕食の配膳を手伝えと言ってくるはずだ。

山の向こうに沈もうとしている太陽の発した紅い光が、部屋の中を満たしていた。

#4 進まない2人

先日、喫茶店で小柏さんと過ごしてから、距離が縮まったような気がしたのだが……

(ジー……)(チラツ)(ビクツ!フィ)と、擬音で表せばこうなる様に、あちら側から視線を感じるものの、小柏さんを見れば、一瞬肩を震わせて目を逸らされるという様な、未だ距離を測りかねる状況にあった。……どうしたものやら……。と、突然首に衝撃を感じた。

「ようー!何だ何だ?恋多き北城君はまたお悩みかい?」何事かと思えば、原因はこのやたらうるさくて、無遠慮な友人、もりやま森山 りょうた亮太だった。やれやれ……。

「恋多きとか人聞きの悪い事言うなよ。俺、コレでも初恋だぞ。あと、考え事をしてる人間の頭を急にヘッドロックするのは止める。」ついでに日頃の恨み辛みまで全部言っつてやろうかとも思ったが、キリがないのでそれは諦めた。

「初恋い?あんだだけ女惚れさせといてか?」森山は、半ば俺の視界を塞ぐ様にして頭をロックしていた腕を解き、机の横にしゃがみながら肘をつき、胡散臭そうな声で突っかかってくる。

「女子が惚れるのと、俺が恋するのは別の話だろ。お前とは頭の出来も、顔の作りも違うんだよ。あとお前、言葉遣いが古くさいぞ。」

「むっ、お前(こ)こそとばかりに言いたい事言いやがって……言葉の古くさは趣味だよ。気にすんな。」趣味じゃなくて性格だろうと言いたくなつたが、相手が趣味だと言うのだ放っておこう。

「まあ、それはそれで良いとおこう。で、お前俺をからかいに来たのか?」最初の絡みから、用があつたとは言い辛く、結局不機嫌そうな問いになってしまった。まあ、森山だから大丈夫だろう。小柏さんじゃ無いし。

「ああ、そう言えば、お前小柏と付き合ってるのか?」……ん?

「何かそれ、昨日も聞かれたぞ。」いやまあ、相手は違うのだが。

「あー、そうか、賢太が何か聞くとか言っつたな。で、結局どうなんだ?」なんだ、結果は聞いてないのか。

「はあ、今のところは付き合つては無い。て、言うかお前等、人の恋愛がそんなに面白いか？」いやまあ、面白がる気持ちは分からなくも無いけど、弄られる側としては堪つたもんじゃ無いんだよな……。

「まあ、他人事だからな。ちよつとくらい良いだろ？」ナニ言つてんだコイツ。

「いや、良くない。全然良くない。100歩譲つて俺は良いにしても、小柏さんにまで聞いて、迷惑を掛けるなよ？」呆れ混じりの声でそう言うと、森山はニヤリと笑つた。

「そうかそうか……じゃあな修弥、後ろ見てみ？」そう言われ、後ろを見ると、

「……あ？」うっかり間抜けた声を出してしまった。何故ならそこに彼女——小柏 彩葉——が立っていたからだった。

Side out

「それで？昨日の喫茶店でも何も無し？」時間は少しばかり遡つて、とある女子のグループで1人が好奇心全開——の呆れ声——でそう言った。

「う、うん。帰りにちよつと、手は繋いだけど……。」問いかけられた、ふんわりとカールした焦げ茶色の髪の女子生徒——小柏 彩葉——は、恥ずかしげに体をモジモジと動かしながら答える。

「ふーん……。手まで繋いだのに、告白は出来ないの？」グループのもう1人が半眼の呆れ声で突っ込みを入れる。まあ、呆れ声という時点で突っ込みという表現は適切でないかも知れないが……。

「うう……。だって、そこまでは恥ずかしくて……。」相変わらず顔を俯かせたまま、彩葉が必死に弁明する。

「いや、手繋ぐ事の方が恥ずかしいでしょ。」が、2人から驚愕を含みながらも、呆れた様子で声で突っ込まれ、沈黙を余儀なくされる。

「やれやれ……て言うか、そもそもあんた北城君の何処を好きになつたのよ。」何も知らない人間が聞いたなら、北城には良い所など無いと言っているとも取つてしまいそうな言い方だが、彼女にはそんな意図

はなく、ただ単純に彩葉が北城を好きになった経緯を知ろうとしているだけだ。

「ええ……。うーん、北城君優しいし、声にも温もりがあるって言うか、あと、外見的にも鋭い様で優しい目とか、細い線とか、髪もつやつやだし……。」北城の方を見ながら頬を染めながらそう言う彩葉に、グループの女子2人は既に、「うへえ」とでもいう様な表情を浮かべていた。

「もうコレ、ベタ惚れって言うか、病気レベルね。」朝から溜息ばかりついているこの2人の発言の中で1番ではないかと言うレベルの呆れ声すら届かない程に、彩葉は北城を見つめていた。が、その視線に気付いたのか北城が彩葉の方を向いた瞬間、肩をビクリと振るわせ、慌てて彩葉は顔を背ける。但し、そこにあっただのは、

「ふ、2人ともどうしたの……。？」あからさまに胡散臭いものを見る様な目で彼女を見る友人2人の顔だった。

「はあ……。彩葉？」仲の良い友人の少し脅しの色が含まれた声に彩葉が再び肩を振るわせる。

「な、何？」怯えて引きつった顔でそう言った彩葉の顔に、友人の手が伸びる。

「どーしてアンタはそんな恥ずかしい事がぬけぬけと言える癖に告白が出来ないのよ!?!いい加減にしなさいよー!」完全に叫び声の様相を呈して居ながらも、抑えられた音量と共に、彼女は彩葉の頬を掴む。幸いにして(?)北城は森山に絡まれているが為にその光景には気付かなかった様だ。

「ひ、ひてててて!」彼女の右手に左の頬を抓られ、頭を上下に揺さぶられている彩葉は、抗議の声も上げられない状況にあった。

「まあまあ、さーやん落ち着きなよ。」一足先に冷静になっていたもう1人の友人が静止の声を掛け、漸くさーやんこと、穂崎ほぐき 鞞音さやねは彩葉の頬から手を離す。

「はあ、はあ。」言いたい事を一気に言って気疲れしたのか荒い呼吸を繰り返す鞞音。

「うう……。」抗議の言葉も無いと言う様に俯く彩葉。

「えーと……。」この空気をどう対処したものか迷うもう一人の女子生徒。

「彩葉。」最初に口を開いたのは鞆音だった。

「ひゃい！」彩葉は怯えた様子で肩を振るわせ、顔を上げる。

「北城君の所に行きなさい。」疲れからなのか若干かすれた声ではあったが、鞆音のその言葉には、さもなければ斬る。とでも言いそうなる無を言わさぬ迫力が込められていた。事実、2人共が声を発する事が出来ずにいた。

「あれだけ恥ずかしい事を私達の前で言えて、北城君の前で自分の気持ちや伝えられませんか？事は何いわよね？彩葉。」言葉で押し切る様にしてそう言う鞆音。端から見ていれば最早友人と言うより姉である。

「は、はい！」但し、当人達にそんな冷静な判断など出来るはずもなく、彩葉は背筋を伸ばして答える。

「だったら早く行く！」そう言われ、彩葉は慌てて席を立ち、北城の席の方へ向かう。

「はあ……。」それを見て、トータルで何回目か分からない溜息をつく。

「上手く行くと思う？」これまで黙っていた1人がそう訪ねた。

「……まだ……無理かも知れないわね。」溜息と共に吐き出されたその言葉には、しかし、辛抱強く応援し続けるという意志が滲んでいた。

#5 友人達の結託

聞いてはいけない事を聞いた。実際にはそうでは無いかも知れないが、直観的にそう思い、彩葉は結局、自分の席の方へ足を向けていた。

「もー！何なのよー！」1日の授業開始前から、酷く疲れた様子の鞞音がもう嫌だと言わんばかりの叫びを上げる。

「まあまあ。さーやん、酔っぱらってる様にしか見えないから・・・。」彩葉と鞞音の共通の友人である女子生徒が、少しばかり辟易した様子でそう言う。事実、机に突っ伏して両手で机を叩いている鞞音のその姿は酔っぱらいその物だった。

「これが落ち着いていられますかっての！もう！」原因は、あれ程の剣幕で念を押したにもかかわらず、北城のある言葉を聞いてあつさり戻ってきてしまった彩葉にあった。

「だ、だって、北城君があんな事言ってるから・・・。」北城の発言に關しては#4を参照して頂きたい。2度も同じ文章を書くのは出来る限り避けたい。

「そーこーに、つけ込むぐらいの勇氣を出しなさいよ！減るモンじゃないし！」手にジョッキがあれば机に叩き付けているのではないかと言うレベルの劍幕に、もう1人も突っ込む氣を無くしたか、目から光を失っていた。

「うう・・・。」

「はあ・・・。」凹んだ様子の彩葉に溜息をついたところで、予鈴が鳴った。

「まあ、もうS H R 始まるし、取り敢えず席戻ろう？」恐らくこの中で1番氣疲れしているのはこの人だろう。諸星 陽向もろほし ひなたがそう言ったところで漸く鞞音が席を立った。彩葉は、自分の席であるため、動く必要はなく、俯いたまま何の動きも見せなかった。

「どうしたものかしらね……。」そんな彩葉を見て、鞆音は悩ましが
な言葉を吐き出した。

Side out

ノートに板書をしたところで、シャープペンの先で2度ノートをつ
つく。そこで、思ったより朝の事がストレスになっているのだと気付
いた。思えば、彼女はまるで何も無いかの様に横を通り抜けて行つた
のだから、俺が森山に言った言葉に気付かなかったと考えるのが自然
かも知れないが、森山の言動からして、それなりの時間俺の後ろに
立っていたのだろう。気付かなかつたとは思いいにくい。

「……。」いつもの癖で独り言を漏らしそうになつたが、授業中であ
るといふ事を思い出し、口を閉ざす。

(はてさて、どうしたものやら……。) 口に出す代わりに、俺は心の中
で呟き、余計な思考を意識外へと追い出した。取り敢えず、今のと
ころは授業に集中しなければ。

Side out

時は進み、昼休憩。第1予備教室にて。

「……と、言う訳。」1人の女子生徒が1通りの話を終え、口を閉ざ
す。

「ああ……成る程。修弥が特別奥手なんだと思ってたが……。」同
じ場所に集まっている男子生徒の1人が口を開く。

「小柏もかなり奥手なんだな。しかも、恥ずかしい事は幾らでも言え
るのに……意外な感じだなあ。」1人目が言葉を切ったところで、も
う1人が後を引き継いだ。此処に集まっているのは、北城と彩葉の友
人である生徒達。穂崎 鞆音、諸星 陽向、森山 亮太、桐島 賢太
の4人だった。

「それでさーやん朝から荒れまくっててさあ。」そう言うのは陽向。

「いや、本人の前でそんな愚痴みたいな事言わなくても。」当たり前のように本人の目の前で愚痴り始めた陽向に、頬杖から少し顔を浮かして、驚愕を含んだ声で突っ込む。

「うぐつ、仕方が無いじゃん。あれだけ期待してあつさり引き下がられたんだからさ。」目の前で愚痴られた鞆音本人は、痛いところを突かれたという様に顔を引き攣らせ、何とか白々しい視線から逃れようとする。

「まあ、それはそれとして・・・何で俺達は此処に集まったんだ？」少々、痺れを切らしたという様に話を進めようとする賢太。

「ああ、そうそう。あの2人、なかなか自分達で進まないじゃない？」言われて思い出したという様に漸く話を進める鞆音。

「ああ、まあ、全く進まないという訳じゃないが・・・若干焦れては来るよな。」

「そうでしょ？だからさ、私達である2人の関係を後押ししようっていう相談なんだけど・・・。」森山の声を聞き、口を開く陽向。最後にどうかな？と聞く代わりに視線で問いかけ、2人の男子の返答を促す。

「成る程な・・・面白そうだし、俺は乗るぜ。」森山はニヤニヤ笑いを隠さず直ぐに返答する。が、桐島は少しばかり躊躇していた。

「桐島君は、いや？」鞆音が少し首を傾げながら気遣わしげな視線を送るが、桐島は頭かぶりを振った。

「いや、それは面白いと思うけど・・・俺、上手くやる自信ないぞ？」桐島が懸念しているのは、自身の本音の出やすさだろう。嘘が下手と言うより、顔に出やすいタイプであり、そのせいで度々女子にからかわれている為、何か演出したりするのは、少々抵抗があるのだろうか

「まあ、それはそれで実働は森山君にやって貰えば良い訳だし。」陽向の説得に頷く2人。そこでようやく桐島が首を縦に振った。

「分かった。そう言う事なら乗ろう。」

「よっしゃ！じゃあ、ちやちやつと作戦会議だけしちやいませようか！」最後の桐島が承諾したところで鞆音が腕を突き上げ、策の練り上

げを提案する。

「なんだよ、まだ策無しだったのかあ?!」しかし森山は、そう言った頭を使う事は大の苦手分野であるため、抗議とも驚愕とも取れる様な素っ頓狂な声を上げた。その様子に一同が声を上げて笑う。如何にも、年頃の学生達にふさわしい平和な風景だ。だが、彼らの知らないところで人は進む。何時までも同じだと思っていた友人達の心は少しずつ進んでいく。彼らの目論見から外れて……。

#6 思わぬ進展

とある教室で、何やら4人ほどのグループがワイワイやらギヤアギヤアやら騒ぎながら目論見を進めている頃、北城達の教室では、別の動きが起こっていた。

Side out

久しぶりに1人でご飯を食べる。鞘音と陽向は何やら用事があると言って、昼休みが始まってすぐお弁当をもって何処かへ行ってしまった。入学した頃くらいしか1人でご飯を食べてなかったから、何となく寂しさを感じる。それに、今は特に、色々と相談したい事があるから特に……。

(あれ?でもちよつと頼りすぎ?)ふと、この数日間を思い出す。思えば、最初に北城君を第1予備教室に呼び出した時も、何日か前から2人に相談して、色々後押しをして貰ってから漸く行動に移してたし……。思えば、いつもいつも友達に頼りっぱなしだった。無意識の内に箸を置き、胸の前で手を組む。

(出さなきゃ……。自分で、勇気を……。)そう心の中で自分に励ましをつける。でも、少し怖くなって北城君の席を振り返る。彼はまだ食事中だ。彼は普段から1人で食事をしていて、周りには誰もいない。今なら……。1つ大きく息をつき、席を立つ。誰かに頼るんじゃない。1人で歩く為に……。

Side out

「北城君。」北城の席の前に立った彩葉が、北城へと声を掛ける。それまで何か悩んでいたのだろう。そこで漸く彩葉が近くにいた事に気付いたらしく、肩をピクリと振るわせる。

「・・・小柏さん？」彩葉から声を掛けられた事が珍しかったのだろうか、北城の言葉の語尾には疑問系が含まれていた。名を呼ばれた彩葉は僅かに頬を染め、次の言葉を絞り出す。

「今日、どうしても話したい事があって・・・放課後にもう1度、1教に來てくれない？」

「1教に？・・・分かった。放課後だね。」以前は手紙で呼び出された第1予備教室に口頭で呼び出された事に疑問を感じたのだろう。北城が首を傾げるが、彩葉の誘いという事もあってか、すぐに承諾した。「うん。じゃあ、また放課後に。」そう言い残して彩葉は自分の席に戻っていく。北城はただその背中を黙って見送っていた。

時間が進み、昼休憩の終わり。第1予備教室での怪しい作戦会議を終えた4人が教室に戻ってくる。その内の1人、森山 亮太が北城の方へ歩いてくる。

「よう！修弥、今日の放課後んだけどさあ・・・。」いつもの乗りで北城の首を腕で絞め、高めのテンションで話し掛ける森山。だが、その言葉は北城が森山の腕を掴んだ事で止められる事になる。

「悪いけど、今日の放課後はちよつと約束があるんだ。何かの誘いならまた今度にしてくれ。」北城のその言葉には、申し訳なさの中にちよつとした凄みが含まれていた。普段なら、突けば上手く響いてくるのが北城なだけに、森山を黙らせるには、それだけで大きな効果を持っていた。

「え、ああそうか。悪かったな・・・。」北城の迫力に押された森山は、腕を解き、数歩引き下がる。そのまま、踵を返して、桐島の方へと歩いていき、どうなってるんだ？と言いたげな視線を送る。しかし、その場にいなかった人間にその場での状況や本人が受けた圧迫感を理解できるはずがない。

「おいおい、そんなにあつさり引き下がっちゃうのかよ・・・。」意外だなと言う様な視線を桐島から受け、森山は決まり悪げに、肩をすく

める。

「いや、あの目はマジだったぜ？アイツ、昼休み前と何かが根本的に違う。何があつたのか知らないけど、深追いしたらヤバイ感じだった。」
「・・・お前がそうまで言うのかよ・・・。どうなつてんだ？」男子2人が揃つて頭に疑問符を浮かべ、北城の方を見る。その視線の先の北城は、何処か上の空の様でありながら、妙なオーラを放っていた。

男子勢がそんな状況にあつた時、女子陣でも似た様な状況が起こっていた。但し、北城の様な凄みを含んだ言い方ではなく、実にほんわりとした、柔らかい言葉遣いではあつたが。

「ゴメンね？放課後はちよつと約束があつて・・・。」北城と同じく、今日、放課後というパターンで誘われた彩葉だったが、此方も予定の為、友人達の偽り（誘われた本人は偽りと知らないが）の誘いを断っていた。

「ふーん、そうなんだ。家の用事？それとも・・・この前みたいに北城君と一緒に喫茶店でも行くの？」前半は純粋な好奇心の様だったが、後半からは、目にキラーンという擬音が入りそうな聞き方をした所為で、彩葉はビクウツ！と肩を振るわせ、目を見開き顔を紅葉させて慌てる。

「い、いや！別にそう言う訳じゃなくて！他の用事だから・・・。ご、ゴメンね・・・？」思い切り慌てて否定した後、語気を緩めて謝る。
「あ、そう・・・。」そこで鞆音は引き下がったが、顔にはあからさまにあーハイハイと書かれていた。鞆音の言葉に混乱し、その様子が彩葉に見えなかつたのは、不幸か幸いか・・・。

S i d e o u t

1日の課程が終了し、全員が帰路につく頃、俺は1教への階段を

上っていた。俺達1年生の教室は5階。1教は2つ上がった最上階、7階に位置している。公立高校としては無駄に高い校舎だ。1教の利用人数が少ないもう一つの理由はこれだろう。以前呼ばれた時、俺は大きな期待を抱えてこの階段を上っていた。結局その時はある意味期待は外れた訳だが、俺はまた同じように期待をしている。だが、前回とは違う事がある。それは、俺が期待以上の不安を抱えているという事だった。・・・もしも、彼女が俺の事をどうとも思っていないとしたら？また、何か別な事としたら・・・？そう考えたところで、俺は大きく頭を振る。彼女に恋したという事は、彼女の事を信頼しているという事だ。今から半信半疑でどうする。俺は一度立ち止まり、大きく息をつく。

「よし、行くぞ。」俺は意識を入れ替え、1教へ再び足を進める。

1教の前に着くと、前と同じように、教室の扉は開け放たれていた。中を覗くと、これもまた前と同じく彼女が夕日に顔を照らされながら、立っていた。前回と違うのは――

「・・・来てくれたんだね。北城君。」――彼女が視線を真っ直ぐに据えていたという事。その瞳には確固たる信念が宿っていた。

「・・・ああ。」その瞳の澄んだ、深い色に引き込まれそうになるが、今度は自分が想いを伝えるんだと言う確固たる意志を持って頷き返す。

#7 夕焼け、放課後、教室に2人きり

夕日に照らされた教室、向かい合って立つ生徒が2人。一見して穏やかな風景でありながら、2人の間には決して割って入る事の出来ない異様な雰囲気漂っていた。しばしの沈黙の後、女子生徒―小柏彩葉―が口を開く。

「北城君。今日は、どうしても伝えたい事があって来て貰いました。」その口調は何処か事務的でありながら、気恥ずかしげなたどたどしさを多分に含んでいた。

「・・・うん。」応える北城は何でも聞こうという意志を含ませた、強い返事を返す。

「うん・・・わ、私は北城君の事が好きです！」少しばかり詰まりながらも彼女の口からは迷いのないキツパリとした言葉が紡がれる。その言葉は、一度は自らが発しようとした言葉、だが、一歩が踏み出せず、ただ待ち焦がれるだけだった。それを彼女の口から聞き、一瞬歓喜に目を見開く北城。

「北城君は、私の事、どう思ってますか?!」この想い届け!と言う様に最後は大声で言葉を出し切った後、顔を俯かせる彩葉。その姿を見て、北城は一つ大きく息をつき、少しの間をおく。(俺は何を迷っていたのだろう。)

「・・・俺も、小柏さんのことが好きだ。」それまでの、何を言われるか分からないという、緊張した表情を、柔らかさを持った眼差しに変え、自身の気持ちを返す。

「・・・本当に・・・?」北城の気持ちを聞き、俯かせていた顔を上げる彩葉。北城はその姿に頷きで返す。

「ああ、本当だよ。だから・・・。」そこで一旦言葉を切り、一歩前へ出る北城。彩葉はその行動の意味が分からず、口を僅かに開き、ポカーンという様な表情を浮かべる。

「・・・だから、俺と、恋人として、付き合ってくれないか?」躊躇いがちな、北城のその言葉を聞いた瞬間、今度は彩葉が目を見開く。

「―はい、喜んで。」だが、彩葉はすぐに口を閉ざした後、たおやかな

笑みを浮かべ、その申し出を承諾した。その様子に、北城も表情を和らげる。

「・・・良かった・・・。」だが、その顔は直後に硬直することになる。なぜなら・・・

「うつ・・・。」突然彩葉が涙を流し始めたからだ。

「ええ!?ど、どうしたの!?!」彩葉の突然の涙に狼狽える北城。その姿には何処か滑稽ささえあった。

「だ、だって、ずっと心配で、もし、断られたらって・・・。」少ししやくり上げながらそう言う彩葉。北城は一瞬躊躇った後、彩葉の肩を抱きしめる。

「えっ・・・。」思いがけない事に、戸惑いの声を上げる彩葉。そんな彩葉に北城は優しい声で語りかける。

「・・・俺もずっと、もしかして、と思って、一歩が踏み出せずにいた。でも、・・・好きになるって、相手の事を信頼するって事だと思ったから・・・、俺は小柏さんの事信じるから、小柏さんも、遠慮無く俺の事信頼してくれたら嬉しいよ。」そう言う北城の胸に、少し恥ずかしげに顔を埋める彩葉。

「うん・・・。」その仕草に頬を緩める北城。だが、突然脇腹周辺に鋭い痛みを感じ、彩葉から体を離す。

「いつて!な、何?」再三の狼狽えの声を上げる北城。彩葉は、意地の悪い様な、はぶてたような表情で北城を睨み付けている。

「彩葉。」

「へ?」突然自分の名前を言った彩葉に対し、間拔けな声を出す北城。「折角付き合うんだから、名前で呼ぼう?だから、私は彩葉。」それで漸く納得したという様に北城が頷く。

「そう言う事か。俺は修也な。知ってると思うけど、一応確認に。」

「うん。今日からちよつと関係が変わるけど、よろしくね?修也。」少しはにかみながらそう言う彩葉。北城も微かに笑いかけ、頷く。

「ああ。よろしくな彩葉。」そう言った後で2人揃って笑い声をあげる。夕焼けに照らされた教室に高校生らしい明るい声が響く。

彩葉の告白から少し時間は遡る。第1予備教室の外側に4つの影があつた。耳を壁に押し当て、中での会話を聞き取ろうとする穂崎鞆音。恐る恐る中の様子を窺おうとする諸星 陽向。気怠げに座り込む男子2人・・・森山 亮太と、桐島 賢太。彼らは、放課後の彩葉と北城の動向が気になり、つけてきていたのだが・・・。

(まさか、彩葉が自分で北城君を誘うとはねえ・・・。) 彩葉と北城は完全に奥手だと思つていた鞆音は、意外感を包み隠さず、しかし中には聞こえない小声で話す。

(いやまあ、それは良いんだけどよ・・・これ見つからないのか?) 女子2人は面白そうに中の様子を窺っているが、森山と桐島は見つかれば彩葉と北城の仲を邪魔するのではないかと、気が気でない様だ。

(まあまあ、こういう時、以外と仲の人間は気付きにくいんだつて。) 完全に仲の様子に集中してしまつている鞆音の代わりに答えたのは陽向。覗き方は恐る恐るではあるが、それなりに面白がつてはいる様だ。

(それにしたつてねえ・・・ちよつと危くない? 中覗くのは・・・。) 若干引き気味で言つたのは桐島。

(まあ、気にしない気にしない。)

(ちよつとみんな黙つて。今良いところだから。) 陽向が言葉を続けようとしたところで鞆音が口を挟んだ。

(へいへい・・・。ホントに物好きだねえ・・・。) それ以降暫くの間、その場が沈黙する。

(・・・みんな、撤退するよ。) 中で2人の告白が終わつた頃、鞆音が目で合図する。

(あいよ。そろそろつとな。) 一足先に森山が腰を低くし、階段へ向けて小走りで逃げていく。それに、他の3人も続く。

「ふいー。まさか盗聴やらなんやらまでする事になるとは・・・。つて

言うか、何であのタイミングで撤退したんだ？」座っていただけで中の様子が分かっていなかった森山が言い、桐島も頷く。

「んー？ああ、それはねえ、結構あの2人の雰囲気が悪くなってる行ってたから。」少し遠い目をする様に話す鞆音。だが、その様子に桐島がゲツというような顔をする。

「まさか、上手く行かなかつたら突入するつもりだったんじゃないかあ…。」いくらなんでもそれはないだろうと言う様な問いかけだったが、

「ん？当たり前じゃない？」鞆音は一切悪びれる様子もなく言った為、グループ内に嘘だろ…という様な空気が流れてしまった。鞆音は一瞬あちやーと言う様な顔をしたが、すぐに元の顔に戻し、

「まあ、良いじゃん。あの2人の恋の成就を祝って、喫茶店でお茶して行こーよ。」空元氣の様な声でそう言った。

「はあ、その位なら良いか。…割りか？」割り、と言うのは割り勘の事だろう。

「ん？とーぜん。」こういうのは男子が多めに払わされる事が多い。森山と桐島はやれやれと言う様に顔を見合わせ、女子陣に付いていく。どうせ祝いだからと腹をくくったのだろう。ある教室に2人の笑い声が響いていた頃、校庭には楽しげな4人の笑い声が響いていた。

#8 2人の初デート

彩葉との告白合戦から数日。俺は、市内の駅前広場の日光を避ける様に樹木の下で人を待っていた。天気予報では1週間後には梅雨入りするだろうとの予測が出されており、夏が近付いてくるのが感じられる様になってきていた。ふと時計に目を遣れば、針は9時30分を少し過ぎるところを指していた。そろそろ来るか?と思ったところで、突然視界を塞がれる。

「だーれだ。」

一瞬パニックになるが、耳元で聞こえてきた可愛らしい声に落ち着きを取り戻し、1つ息をつく。

「彩葉。」

その名を呼んだ瞬間、視界が開かれ、昼間の日差しが目を突き刺した。

「正解!」

ピヨコンと俺の横に飛び出してきた彼女は真っ白なサマーワンピースに身を包み、髪にちよつとした飾りを付け、はにかんだ笑みを浮かべていた。その姿は衝動的に抱きしめたくなる様な可愛らしさがあった。が、人目があったので、それは憚はばかられた。

「へえ、—綺麗なワンピースだね。凄く似合ってる。」

せめて胸中の動揺が表に出ない様に、出来うる限りの微笑みを浮かべる。

「ふえ!?あ、ありがとう?」

突然褒められた事に驚いたのか、何故か言葉の最後が疑問系になる彼女を見ながら、俺は漸く冷静さを取り戻した。

「それじゃ、行こうか。」

市内電車の発着場へと体を向けながら、彩葉に向かって手を差し出すと、すぐに柔らかな感触が帰ってきた。

「うん!」

夏のような日差しの中を2人並んで歩く。それは、俺にとって1つの幸せだった。

八丁堀から紙屋町の間、アーケード通りの様になった商店街をぶらぶらと歩きながら、彩葉と言葉を交わす。時折、気になった店に寄って店内を物色してみるが、彼女は気に入らなかったものが無いのか、それとも遠慮しているのか、今のところ特にこれと言ったものは購入していない。が、此処で今度は俺が、気になる店を見つけた。

「ちよつとここ寄って行こうか。」

俺の指さした方を見て、すぐに頷いた彩葉の手を引いて入ったのは、ちよつとレトロな雰囲気醸し出すアクセサリーストック。店内に入って見ると、様々な種類のアクセサリが棚や台に陳列されていた。その内どれにも純宝石というものは見当たらず、どちらかと言えば、ガラスで出来たアクセサリを多く揃え、お高くは纏まらないという様な意図を前面に押し出していた。店主は青色のバンドナに丸眼鏡、顎髭を少し伸ばした優しそうな風合いを醸し出していた。

店に入ってから暫く立って、ふと彩葉の方を見ると、何やらネックレスの方に見入っていた。後ろから覗いてみると、彼女が見ていたのは切子（カットグラス）の製法によつて作られたネックレスだった。いや、装飾品が付いているから、ペンダントと言うべきなのか。装飾部の切子は、鼈甲色と透明な部分があるグラデーシヨンの付いたガラスの上に、緑のガラスを着せ、複雑な細工を施されていた。正確な角度でカットされたガラスは、外から差し込む光を分散させ、美しい光を放っていた。切子の上部には、金具が埋め込まれ、そこにチェーンが通されている。結構良い趣味だな。俺的な尺度で、だれど。

「それ、気に入ってた？」

後ろから声を掛けると、彩葉がピクツと肩を振るわせ、振り返る。

「あ、うん。結構色合いが気に入って……。」

切子のペンダントを見つめながらそう言う彩葉。

「ふーん……。」

気に入ったのなら良いかと、そのペンダントを手取る。値札に書かれていた値段は、6000円程。この少しばかり湾曲した小さなガ

ラスに細工を施すのは結構な手間の筈だが、技術のわりに安い方だな。

「え？買ってくれるの？」

彩葉は遠慮したのか少し途惑った様な声で聞いてくる。

「まあ、初デートだし、記念にね。」

「あ、ありがとう。」

彩葉はデートという単語に反応したのか、少し頬を染めていた。

「じゃあ、買ってくるから。」

俺はそう言い残して店主の座るカウンターに向かった。

「良いねえ、初デートかい？」

優しそうな店主が見た目に沿った穏やかな声で聞いてくる。

「ええ、まあ。」

「そうかあ、じゃあちよつとオマケしとこうか。」

そう言うと、店主は電卓を叩き、値札の値段から1000円程値引いてくれた。

「ああ、ありがとうございます。」

随分なサービスだなと思いつつ、提示された額を支払い、会計を済ませる。振り返ると、彩葉が何かを持って立っていた。俺と入れ替わりで、店主にそれを手渡す。

店から出たが、今すぐには購入したものを渡さず、帰りに別れる前に渡す事にした。また暫く歩き、今度は軽食店に入る。テーブルに着き、同じものを注文する。

「そう言えば、さっきは何買ったの？」

先程の店での事が気になり、聞いてみるが、

「うーん。それは秘密。帰りのお楽しみって言う事で。」

彩葉は答えてはくれなかった。まあ、お楽しみというのならそういう事にしておこうか。

「ふーん。まあ良いか。この後、どうする？」

「午後はもう、普通にぶらぶらしたいな。公園とか、まあ、このまま商店街でも良いけど。」

公園というのは、平和公園の事だろうか。

「……ん、分かった。」

取り敢えずは商店街を暫く歩いて、それから移動だな。そう計画を立てたところで、注文したものが運ばれてきた。

あれから暫くたって、時刻は日の沈み始める頃。俺達は、平和公園の少しばかり人目の少ないベンチに座っていた。

「結局、殆ど商店街でだらだら歩いてただけだったな。」

「そうだね。……でも、2人でいられただけで、今日は楽しかったよ？」

そう言いながら、俺の肩に頭を預けてくる彩葉。ふわりとした髪が肩に触れ、ほんのりと甘い香りが漂ってくる。

「そうだな。俺もかなり充実してたよ。」

そう言った時、肩から彩葉の頭が離れる。不思議に思っただけを見ても、少し頬を赤らめた彩葉の顔が傍にあった。そして次の瞬間――、彩葉の唇が俺の口に触れた。そのまま数秒。漸く顔を離れた彼女の顔は真っ赤に染まっていた。

「こ、これは、お礼だから。今日は修也の方から誘ってくれたから……。」

「そう。」

突然のキスに動揺する心を抑えようと、少し素っ気ない返事になってしまったが、気にしている暇は無い。

「取り敢えず、今日はもうそろそろ帰ろうか。」

そう言っただけ、ベンチから腰を浮かせる。彩葉は一瞬名残惜しそうな顔をしたが、同じようにベンチを立つ。

「そうだね。プレゼントも交換しなきゃだし。」

気のせいだろうか、ここの所。少々彩葉が積極的になっている様な気がするのだが。

「それもそうだな。」

午前と同じように彩葉に手を差し出す。握り返された感触をしっかりと感じ取りながら、俺は歩き出した。

「じゃあ、これ。家で開けてね。」

あれから何事もなく、電車で彼女の降りる駅まで帰り、彼女を家まで送りとどけた所で、今日購入したものを交換した。

「ん、分かった。それじゃ、また明日。」

「うん、じゃあね。」

彩葉の返答を聞き、踵を返そうとしたが、ここでちよつとした悪戯心が出た。彩葉に顔を近付け、頬に唇を触れさせる。

「えっ!？」

これにはかなり驚いた様子で、素つ頓狂な声を上げる彩葉。その姿を見て俺は今度こそ踵を返した。

「ははっーじゃあな!」

反撃が怖いので、駆け足で逃げると後ろから「もうっ!」という様な怒鳴り声が聞こえた。明日が怖いなこれは。

再び電車に揺られ、俺は自分の家に戻ってきた。自分のベッドに腰掛けて、彩葉から貰った包みを開けてみる。袋の中には、水色のガラスの小さな六角柱を3つ繋げた様な飾りが付いた金属チェーン製ブレスレットが入っていた。

「これもカット製法か・・・。」

ガラスの六角柱の角は、一体成型にはない程角張っており、それだけで、ガラスを切り出して作られたものだという事が分かった。あの、優しいアクセサリショップの店主が値札を綺麗に外していた為、幾らしたのかは分からないが、成型コスト分それなりの値段はしたはずだ。

「貰って良いのかこれ・・・。」

少し不安になったところで、携帯に着信が入った。ちよつとばかり前の型のガラケーの外部ディスプレイには芹沢せりざわ 龍士りゅうじの文字。―大阪に住む俺の従兄弟からだった。携帯の通話ボタンを押し、耳に当てる。

「もしもし? 龍士か?」

『おお！修也？ワイや龍士や。彼女出来た？』

やたらハイテンションな大阪弁で捲し立ててくる龍士。面倒くせえなあ……。だが、まあ面白いから良しとしよう。

「・・・龍士その胡散臭いエセ大阪弁いい加減止めろよ鬱陶しい。あと、あいさつからいきなり恋愛の話に持ち込むなよ・・・彼女は出来た。」
『エセに胡散臭い・・・酷い言い様だな、ってちよい待てお前最後何て言った？』

不機嫌そうにぶつくさ言っていた龍士が何を不思議に思ったのか、最後を聞き直して来た。

「だから、彼女出来たって。」

『はあ!?お、おま、嘘だろ!?何だそれ羨ましい。』

嘘だろ?と言っておきながら、思いつきり信じてるんだが。

「はあ、うるせえよ。それより、何か用があったんじゃ無いんか。」

おっと、面倒くさくなって思わず素を出してしまった。

『ああ、そうだ。明日からお前んとこの学校通う事なったからな、一応連絡しとこうと思つてな。』

「はっ。」

龍士の突拍子もない言葉に、間拔けな声が出てしまう。

『いや、だからな?明日からお前んとこの学校通う事なったて言ってるんだよ。』

「はあ!?嘘だろ!なしてそがあな事になったんじゃ!?!」

『いやあ、ちよつと喧嘩沙汰でな、親が危ないからつて。』

喧嘩沙汰?どうしてそうなった。お前参加してないだろうな?喧嘩ッ速いからな

「いや、それはまあええとしても、何で明日からよ!?!」

『ああ、すまんすまん。すっかり忘れててな。転学手続きとかで色々忙しくて。』

「忘れてたって、お前、今何処におるんや。」

『今?今は、家だよ。近々引っ越しもするからな。ま、ちよつとはお前の家に近くなるぞ。』

「要らねえわ。元から広島市内なんだから変わりやせんつて。」

「はっはっは。ま、報告つっー事で、明日から宜しくな。お前の彼女にも会いたいし。」

そのまま、一方的に電話を切られてしまう。やれやれ。彩葉がどうこうよりよっほど面倒な事案が発生したもんだ。

「あー、明日学校行きたくねえ。」まあ、ぼやいても始まりはしない。頭を切り換える為に、夕飯の支度を手伝おうと、ベッドから起き上がる。机の上に置かれたブレスレットが、西日を反射して幻想的な光を醸し出していた。

#9 転校生（従兄弟）

修也の従兄弟、芹沢 龍士から転校すると電話で連絡があった翌日。修也は教室の角の自分の席で、頭を抱え込んでしまいたい気分になっていた。修也の従兄弟、龍士は俺と対比した時、爽やか系で、且つ知性もある所謂モテ系。ただ、笑いが取りたいのかやたらテンションが高く、若干偏見に満ちた大阪弁を所構わず発したりしている、流石に飴ちゃん舐める？とは聞いては来ないが、兎にも角にもそれが欠点となっているのか、周囲の女子からはボーダーラインと言うべきか、面白い友達以上には見られて居らず、モテ体質にもかかわらず彼女無し、だがバレンタインには食べきれず、容器の底で溶けて食べられなくなるチョコが続出するレベルで大量にチョコを貰っている。そんな謎すぎる従兄弟が転校してくるとなれば、何をしでかすか分かったものではなく、悩みの種となっているのだろう。そんな修也の元に登校してきたばかりの彩葉がやってくる。

「どうしたの？修也。」

修也が悩ましげにしているのに気付いたのか、気遣わしげに修也の顔をのぞき込む。

「ん、ああ、実は昨日従兄弟から電話があつて……。」

そこで言葉を切り、大きく溜息をつく修也。

「何か、あつたの？」

気遣わしげという表情から、どこか心配そう表情に変わった彩葉の言葉に、修也は首を横に振る。

「いや、従兄弟が転校してくるって言うんだよ。しかも今日。」

「え？今日？連絡があつたのは？」

彩葉が、目が点になったような顔で聞き返す。

「昨日。」

それに対し、龍士に対する呆れを前面に押し出した素っ気ない返事を返す修也。

「ず、随分急だね。」

修也の返答に少しばかり顔を引き攣らせる彩葉。その言葉で枷が

外れたか、修也が愚痴を言い始める。

「そーなんだよ。あいつ、いつも何でも急だし、これと思つたら何も聞きやせんし、自分の思う通りの大阪弁を通してきやがるし、絡まれたらちよいちよいうザイし、まあ、ノリが良いから喋ってる間は面白いんだがなあ。」

「そ、そうなんだ。」

最早、酔っぱらいのようにも見える修也の愚痴に、何処かの誰かさんのデジャヴを感じたのか、彩葉が辟易したような表情を浮かべた。「ああ、ごめん。目の前で愚痴られてもあんまりいい気しないよな。」そう言いながらも、溜息を吐きながら首を落とす。

「ううん。気にしないで良いよ。修也の従兄弟ってどんな人なのか興味あるし。」

恋人を持つ人間にはそれなりにある事らしいが、この時修也には彩葉が本当に天使に見えただろう。

「そう言つて貰えるありがたいよ・・・。」

修也がそう言葉を絞り出した所で、予鈴がなった。

「つと、もう戻らなきや。それじゃ、また後でね。」

彩葉が席へ戻つて言ったところで、担任の教師が教室に入ってきた。間もなくSHRと共に面倒ごとの時間がやってくる。

Side out

「みんな揃ってるな？今日は、転校生を1人紹介するぞ。」

担任の鞍田 真誠が黒板に芹沢 龍士と、縦方向にやたらと綺麗な文字で記した。既に胃が痛い。一体アイツがどんな挨拶をするのやら・・・。

「それじゃ、入ってこい。」

担任に呼ばれ、そいつが教室に入ってくる。以前、中学時代の友人に、コイツと対比して、パツと見、俺の方がクール系イケメンだとしたら、龍士の方はさわやか系イケメンだと言われた事がある。事

実、龍士が入ってきた瞬間に歓声を上げかけたり、パツと頬を染めた女子も数人いた。まあ、今の内だろうとは思うが。なにせ、
「おつす、何やかんやあってこつちに來る事になった、修也の従兄弟の芹沢 龍士や！仲良うしたってや。」

この爽やかな皮を被ったアホは、所構わず大阪弁で話すのだから。龍士に一目惚れしかけた女子の数人が、テンションの高い大阪弁にサツと引くのが分かった。やれやれ……。

「ああ、せや、ワイが大阪弁で話すから言うても、真似して変な大阪弁で話さんでもええからな。」

変な大阪弁という点に関しては、お前が言うなど突っ込みを入れたくはなる。つーか、ウザいなコレ……つたく、しゃーねえ。こういう時は……喰らえー！

「いい加減そのエセ大阪弁を止めろオ！」

必殺クーゲルシュライバー！（ボールペン：ドイツ語）

「つつあ!? あつぶねえ！何てモン投げんだ修也ア！」

チツ、弾かれたか。

「うるせえ！昨日そのクソウザイ大阪弁使うなって言っただろうが！」

「おま、昨日そこまで言っただろ！」

「だからどうしーうわっ!?!」

何だ!? チョークか？ 一体誰が……

「あ。」

「よし、2人とも、喧嘩は結構だがSHR中だからな？」

しまった、ヒートアップし過ぎたか……怒ってるか？

「すみません……。」

「よしよし、それが最初に出てくるのは良い事だ。今回は従兄弟同士だし、見逃してやるが、相手に直接害が及ぶ事をするなよ?……間接的なら良いとは言わんが。さ、芹沢の席はあの1番後ろの空席の所だ。」

「はー。」

言われて龍士が指定された席に向かう。

はあ、コレは鞍田先生の寛容な処置に感謝するしかないな。龍士は・・・ほつとけば良いか。どうせアイツは気付いた時には俺が話した事がない奴とすら仲良くなってるんだ。事実、既に隣の席の女子に話し掛けてるし。

「ああ、そうだ北城。お前、芹沢の面倒見てやれよ。」

面倒見るとか小学生かとか、何で俺がとか言いたい事は色々あったが、取り敢えず今は担任に従うっておこう。

「分かりました。」

「頼んだぞ。特に伝達事項は無いからこれで終わりだな。じゃ、1時間目の準備しとけよー。」

そう言って鞍田担任教諭が教室を出て行く。全く、面倒だな・・・とも言ってられないか。もう早速やらかしちゃってるし。

「そんでまあ、警察沙汰とまでは行かんかったんじゃけど、俺の親がな。」

時間は昼休憩。彩葉と俺と龍士の3人で弁当を並べて、龍士の転校の経緯（いきさつ）を聞きながら、食事を進める。龍士が転校する事になった問題というのはつまり、執拗な弄りに耐えかねて、ある生徒がうっかり手を出してしまい、結果、集団での殴り合いになってしまったと言う物だった。

「それでもアホだな。手出すより先に先生に相談すりやええのに。」

「つつても、虐められとる側は周り見えづらいつて言うじゃん？結果的に殴り合いに参加しとったのは、嫌がらせ受けとったのと、その人等を気にしよったのと、嫌がらせしよった五分五分じゃったけど、嫌がらせされとる間は誰が嫌がらせされとるか何か気付いとらんかったんじゃろうし、1人じゃなかなか先生に言いに行くつて言うのは難しいだろうからな。」

「まあ、大体弄られるのは気の弱い奴だから分かんんでも無いけど・・・お前は？」

「いやまあ、何遍も言うけど、親が心配性で、この学校危ないし修也の
いてる学校ならそれなりにやりやすいやろか言うて、こっち来さされ
たんや。」

「ああ、そう。．．．龍士、エセ大阪弁戻ってるぞ。」

流石あの親父殿やってくれやがる。親族の中で1番のくせ者はあ
の人だからな。1番心配性で1番羽振りも良いけど。

「エセ言い過ぎだろ．．．それよか、修也の彼女めっちゃ可愛ええじゃ
ん！どうやって捕まえたん？」

「捕まえたとか言うな。あとお前親父臭いぞ。」主に話し方がとは口に
しなかった。

「別に、いいじゃないか俺の好みなんだし。」

「話し方がウザイのはストレスが溜まる。周りにも嫌われやすくなる
んだからさあ．．．。」

「．．．2人とも仲良いんだね。」俺と龍士の親密なやり取りを見て、彩
葉がぼそりと呟く。

「まあ、従兄弟だしね。仲は良い方だと思うよ。．．．思うよ?」

「何で言い換えた。ま、従兄弟つつーより、兄弟みたいなモンだな。」

兄弟ねえ．．．。

「ふーん、そうなんだ。あ、そう言えば、修也って小さい頃どんなだっ
たの?」

!?

「ちよい、彩葉?」

「修也か? 修也はなあ．．．」

「やあめろおおお!」

結局昼休憩は龍士による俺の幼少期の恥ずかしい話だけで終わっ
てしまった。

Side out

「楽しそうね。あれ。」

そう呟いたのは、以前の彩葉グループの鞘音。視線の先には、転校生である龍士と、恋人同士である彩葉、修也で構成されたグループがあった。

「そうだね……。て、言うか芹沢君って何か独特のオーラ無い？大阪人特有のっっていうか。」

現在、鞘音達は彩葉を取られてしまった為、彩葉を除いた女子2人と、修也関係でグループインした亮太、賢太の4人で集まっている。

「あー、分かる。修也の従兄弟っただけで結構特別な感じがするけど、もっと別な何かがあるよな。」

「まあ、私達修也君についてあんまり詳しい訳じゃないしね。って言うか、修也君のあの反応には驚いたけど。」

亮太の言葉に陽向が悲観的な事を口走る。

「ああ、そうだな。修也があそこまで取り乱すってのも珍しい。」

「……そう言えば、龍士君も結構イケメンじゃない？」

それまで黙っていた鞘音が普通には分からないほどうっすらと頬を赤らめてそう言った瞬間。

「「え？」」

嘘だろお前がかよという様な、驚愕の視線が注がれる。が、鞘音はどうしたの？というように首を傾げただけだった。

「いえ、何も。」

慌てて賢太が誤魔化す。穂崎 鞘音。彼女は微量の天然である。自分の恋(?)に気付かぬ程度には。

#10 スピード勝負

6月の始め、梅雨入りが宣言されたものの、晴れた日などは肌にまとわりつく様な、じっとりとした蒸し暑さを感じるようになっていた。そんな日の外で行われた体育の時間での出来事である。

Side out

「ああつづう〜・・・何でこんな日に外で体育なんかするかな〜。」

1人の女子生徒が、気怠げな声で文句を言い出す。

「まあまあ、さーやん、あの人の実力を見るチャンスじゃない？目、付けてたでしょ？」

そう言つて鞞音をなだめる陽向の視線の先には、先日転校してきたばかりの男子生徒―芹沢 龍士―の姿があつた。

「ああ、そうね・・・つて言うか、この学校特に同じ学年の連中の足が遅いのよ！何よ、最速で6秒94つて!？」

「いやまあ、それはそうだけでも、何にしたつてさーやんは速すぎだと思ふよ?。」

発狂気味な鞞音に対し、呆れ声で応じる陽向。

「そうだよねー、幾らなんでも女子で6秒22は速いよね。先輩方も立つ瀬無しだし。」

更に追い打ちとばかりに彩葉が棒読みじみた冷静な声でそう言う。幾らつきあい始めたばかりと言えど、四六時中引つ付いている訳ではない。こういう時間は女子グループにいる事が多いようだ。

「うっ、仕方が無いじゃない。走れちゃうんだから。」

言い訳がましく鞞音が言う。が、

「いやまあそれはそうだけどさあ・・・他の人をそれに巻き込むのは止めよ?。」

陽向が肩に手を置きつつそう言った為、沈黙を余儀なくされる。

「やれやれ。・・・果たして芹沢君は鞞音ちゃんのリバルに成り得る

のかな？」

項垂れる鞞音に呆れの視線を向けた後、やや悪役めいた口調でそう言う彩葉。

「あれ？なんか彩葉キャラ変わってない？」

驚いたように顔を上げ、そう言った鞞音の声には戸惑いが含まれていた。

「気にしないで。」

彩葉は指摘されたのが恥ずかしかったのか、少しばかり顔を赤らめて即座にそう言った。男子ならば突然口調を変えるなど良くある話だが、・・・女子は変化には敏感なのだろうか。

「と、準備始めたよ。走るんじゃない？」

陽向のその言葉に、鞞音が楽しげな表情を浮かべる。

「さて、どんな走りを見せてくれるのかしら？」

「楽しそうだね、さーやん。」

先ほどまでと打って変わって好戦的な笑みを浮かべる鞞音に、此処までもつとも落ち着いていた陽向が目を細める。

「そう言えば、龍土って足速いのか？」

所変わって男子勢。亮太が思い出したように訪ねる。

「ああ、まあな。あいつ、こっち来たたら大体、近所連中と遊ばない時とか家の近くの山とか行って走り込んでたし、鬼ごとかしたら、地の利をよっぼど生かさない限り絶対追いつけないし。足は速いと思うぞ。」

「地の利を生かすって言ったら・・・掟破りの地元走りみたいな事か？」
「掟破り？それは良く分からんけど、俺らは飛び降り耐性だけはあるから、目につきにくい石垣の上からタイミング合わせて飛び降りるとかだな。」

「飛び降り耐性・・・？っーか、最早走っての勝負はしてないんだな。」
「まともに走ったんじゃまるで追いつけないからな。あつちは小回り

も利きやがるし。まあ、最近はそう言う手使ってもフェイント掛けられたりで捕まってくれないんだよな。」

「ま、土地勘もつくし、慣れがあるだろうからな。・・・っと、もう走るか？何秒くらいで来るんだろうな？」

「さあ？去年の時点で6秒80だからな。もうちよつと速くなってると思うけどな。」

「到底俺達が敵う相手じゃないな。」

賢太が、鍛え方が違うよとでも言うように首を横に振る。

「おつ、始まったぞ。って速いな！」

「初っ端で加速して行って、後半持続させるタイプか？」

「まあ、そうだな。気が短いつて言うのもあつてか、先に加速したがるタイプではある。」

「はえーもう走りきったぞ。つっても良く分かんねえな、誰かと競走しねえかな。」

亮太が感嘆しつつ、期待を込めた声でそう言う。

「あるなら、陸上部の人だろ。穂崎さんとか速いらしいし。」

「あー、6秒前半だろ？速いよな。」

賢太のその言葉に、全くだとばかりに他の2人が頷く。

S i d e o u t

1時間目開始直後の準備体操中、男子の体育の先生と女子体育の先生が話しているのを見かけた。

「穂崎ー、準備体操終わったら、300mトラックのスタート地点に来てくれ。」

話を終えたらしい先生が駆け足気味に寄ってきてそう言う。何の為かは分からないけど、拒否権は無いらしい。

「はあ、分かりました。」

自分でも気の抜けた返事だと分かるような、適当な返事だったが、そこは先生にとっては重要な事では無いらしい。

「それで、私は何をすれば良いんですか？」

300mトラックのスタート地点に呼ばれ、面倒くさがっているのを隠さず先生に聞いてみる。

「ん？ちよつと、競争をな・・・。」

先生はそれを気にした様子も無く答えてくれる。この学校の教師達は、ある程度生徒の態度が悪くても見逃してくれる。肩の力を抜きたいタイプにはかなりありがたい性格と言える。

「えーと、穂崎さんって言ったっけ？」

何となく準備運動を始めた時、突然後ろから声が掛けられて、ビクリと体を起こす。

「そうだけど？」

「へえ、女子なのに・・・って言ったら失礼か。凄いな学校で1番走るのが速いとは。俺も足には自身あるから、今回はよろしく。」

そう言いつつ、芹沢君は手を差し出してくる。

「先生、競争って・・・？」

まさかコイツと？という視線を送っただけだが、先生はあっさりと頷いた。

「ああ、芹沢と走って貰う。」

「そうですか・・・。じゃあ、よろしく。」

最初のイメージとはえらく違うな思いながらその手を握り返す。その時、ふと手に目を遣り、驚愕する。

(指、ほっそー！)

手の平は、私の手を包み込めるほどに大きいのに対し、指は女性のものと思えるほど細く、長い。

「どないかした？」

じつと手を見つめたまま動かなかったからか、芹沢君が不思議そうな顔で訪ねてくる。

「あつ、ごめん！指細いなくと思って・・・。」

慌てて手を離し、目を逸らしながら弁明する。

「そう？修也と変わらへんと思うんやけど。」

相手は、自分の手をまじまじと見詰めながら、首を傾げる。

「え？ごめん北城君の指そんなによく見た事無い。」

と言うか、異性の手などそうまじまじと見ないのだけど。

「2人とも、授業中なんだが。」

危うく会話がヒートアップしかけたところで先生によりクールダウンさせられる。

「す、すみません。」

「おっと、失礼しました。」

丁寧な言葉な筈なのに雑に聞こえるのは何故なんだろう。顔と性格のせいかな？

「はあ、まあいい。2人には300mを走って貰う。手を抜くなよ。」

「二分かってます。」

偶然にも同じタイミングで肯定する。・・・取り敢えず、真剣勝負のつもりで行かなきゃね。

「なら良い。スタート位置に付け。」

そう言われ、スタートラインに並ぶ。

「良いか？行くぞ？よーい・・・。」

リレーなどではないので、クラウチングスタートでのスタートが基本になる。あんまり好きじゃないんだけど。

「どーんー」

先生の合図と同時に足で地を蹴る。さあて、お手並み拝見と行きましようか。